序に代えて

本学大学院文学研究科は、大学文学部を母体とし、その教育研究活動を引き継ぐ、より高度な機関として発足し、文学部との連携に支えられてきた。そのために、何人もの修士は生み出しながらも、大学院独自の活動や研究成果が少ないという課題をかかえてきた。修士論文の作成とは別に、専攻内で教員と院生とがともに一定のテーマに取り組むような共同研究が行なえれば理想的であり、その課題の解消ともなると考えられた。そうした状況の中で、平成十八年度に、日本語日本文学専攻の大学院研修として、京都の下鴨泉川町に日新電機株式会社が「石村亭」として保有している、谷崎潤一郎の旧居「後の潺湲亭」を訪問する機会を得た。本専攻に、その分野を研究領域とする院生はほとんどいなかったが、何人もの院生が協力して研修の準備を進めるうちに次第に関心が高まり、「谷崎潤一郎と京都」をテーマとして共同研究に取り組んでいく態勢が整った。

当時、私は、文学研究科長の職を兼務していたので、その計画を学園に申請し、学園の理解を得て、資料収集費等と、平成二十年度に研究成果の報告書を作成する予算が認められた。十八年度の準備作業の後、十九年度・二十年度の共同研究は、主として私の大学院での「近現代文学演習」の場を使って進めた。また、十八年度の研修を、「後の潺湲亭」および法然院等の見学として行なったのに続いて、十九年度の研修は、「倚松庵」および芦屋市谷崎潤一郎記念館等の見学として行なった。その間、「谷崎潤一郎と京都」の研究を続けてきたが、メンバーは流動し、新入生が加わったり、中心になっていた院生が進路変更等で退いたりと、少なからぬ変動があったが、何とか、この『研究報告書』を上梓することができた。

学園をはじめ、ご支援・ご協力をいただいた方々および諸機関に感謝の意を記しておきたい。広く御批正を乞うとともに、これをきっかけとして、今後、本研究科において、さまざまな共同研究が生まれ、結実していくことを願っている。

平成二十一年三月

文学研究科日本語日本文学専攻　清水康次